空間の前置詞 in と out of へのプロトタイプ・アプローチ

森　光　有　子

例(1)-(3)における“in,”および(4)-(6)における“out of”はどのように説明されるだろうか。

(1) John is *in* the office.

(2) There's nothing *in* sight.

(3) Mary is *in* love.

(4) John is *out of* his office.

(5) John is *out of* the race now.

(6) We're *out of* trouble now.

川の土手を表わす bank とお金を預けておく bank が、全く異なった無関係のふたつの概念であるにもかかわらず偶然同じことばで表わされている、と考えられるのと同様に、(1)-(3)の“in”や(4)-(6)の“out of”は、それぞれ3つの全く異なった概念を表わすのに用いられており、同一語が使用されているのは単なる偶然である、という同音異義(homonymy)の考え方をとるのが適切であろうか。あるいは、IN および OUT OF という極めて抽象的な概念があって、(1)-(3)の“in”はそれぞれ同一の抽象的概念 IN の個別的例であり、同様に(4)-(6)の“out of”もそれぞれ抽象的概念 OUT OF を共通して持っている、という抽象化の考え方をとるのが適切であろうか。いずれの立場をとっても十分に説明しきれない点が多々生じることになり、いずれも妥当とはいえない。[1]

このような伝統的説明と異なり、経験主義者(experientialists)はメタファーによる説明を試みる。経験主義者の立場に立てば、メタファーによる概念はわれわれの肉体的(物理的)経験に基づくところが大きい。また彼らは、その肉体的経験はカテゴリー分類にとって中心的な役割を果たすと考える。われわれはプロトタイプ(原型)に基づいて物事をカテゴリーに分類しており、このプロトタイプに基づくカテゴリー分類は、プロトタイプを中心とし、プロトタイプから比喩的に拡大されたものがその周囲を取り巻く、といった放射状に広がる構造を生み出すと考える。

以下この小論で、(1)-(6)、およびその他のさまざまな表現における in/out of の意味を考えるとき、さまざまな意味のうちの一つが原型的・中心的意味で、他の意味は中心的意味

とメタファーによって関係づけられる意味であると考える。そしてこれらの意味は全部で、原型的意味を中心として、周りを比喩的意味が取り巻く放射状に広がる構造を成すと考える。ではまず、in/out of の原型的意味は何かを考えてみよう。

1　in および out of の中心的意味

in/out of の中心的意味としてこれまで言われてきたさまざまな概念のうちの代表的なものの一つに、inclusion/exclusion がある。in/out of を inclusion/exclusion によって定義づけることは、landmark (lm) に対する trajector (tr) の位置関係をトポロジカルに記述することになる。図１－３に表わされるように、全体的にせよ部分的にせよ landmark の境界線が trajector のそれを含んでいる (include)場合には、“A (tr) is *in* B (lm)” のように “in” が用いられ、図４－５のように landmark の境界線が trajector のそれを含まない(exclude)ときには、“A (tr) is *out of* B (lm)” のように “out of” を用いて表わされる。これらの場合、landmark と trajector の両者の境界線が接しているか否かは問題にはならない。

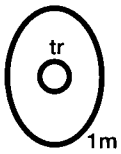

図１

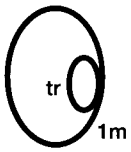

図２

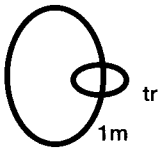

図３

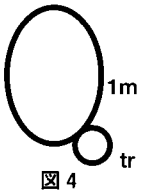

図４

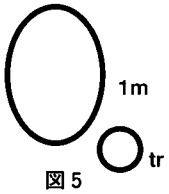

図５

しかしながら、in/out of の生じる表現をいろいろと見ていくと、事はそれほど単純ではなく、in と out of をより適切に記述しようとするとき、トポロジカルな記述のみによる説明に疑問が生じる。inclusion/exclusion は in/out of を説明する際に一般的に与えられている概念であるが、これだけではかなり不十分であると思われる。

Vandeloise (1991) は、inclusion/exclusion によるトポロジカルな定義と比較して、container/contained という機能的な(functional)関係を重視する定義を支持している。Vandeloise は、英語の in と out of に相当するフランス語の dans と hors de を記述するために、container/contained による機能面からの定義を導入したが、これは英語の in と out of にもうまく適用できる部分があると思われる。したがって、この container/contained の関係を部分的に援用して、英語の in/out of を考えてみることにしよう。

1．1　container/contained による in と out of の記述

Lakoff と Johnson は彼らの共著の中で次のように述べている。

> We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation. (Lakoff and Johnson 1980, p. 29)

すなわち、われわれ人間は、皮膚の表面を外界と境界を接する表面と考え、皮膚の表面によって自分の肉体とそれ以外の世界を区切っている。自分の肉体を内(in)、自分の肉体以外の世界を外(out)の世界として捉えている。われわれ自身が＜内－外＞の方向性を持つ容器(container)なのである。われわれ人間はこのような肉体的基盤を持っており、自分自身の肉体的経験に基づいて物事を考える。つまり、自分自身が持つ＜内－外＞の方向性を、表面によって境界を接する他の物理的物体にも投影し、それらの物体もまた内側と外側とを持つ容器であると見做すのである。このように考えるとき、in-out(内－外)の原型となる意味はわれわれの肉体的経験に基づいており、容器(container)の中に含まれている(contained)か否か、ということになると考えられる。

われわれが自分自身の＜内－外＞の方向性を他の物理的物体に投影している例を考えてみよう。たとえば、部屋は明らかに容器と考えられる。したがって、例(1)や(4)が可能であり、また次の(7)のような表現が考えられる。

(7) John is *in/out of* the room.

これらの例における“John”はいずれも trajector、そして“room”および“office”は landmark である。landmark が container(容器)であり、trajector が contained(その容器の中に含まれている)という関係にあるならば、“A (tr) is *in* B (lm),” 一方、landmark が trajector に対して container の関係になっていないとき、つまり trajector が landmark に contained されていない関係にあるときには、“A (tr) is *out of* B (lm)” ということになる。

in や out of のあらわれ方がこのような例に見られる種類のものばかりであれば、container/contained の関係を利用しなくても、inclusion/exclusion によってトポロジカルに定義することも可能であるかもしれないし、図1および5で表わすこともできるだろう。ところが実際には、トポロジカルな定義では説明できない例も多く見られる。container/contained の関係を用いる機能面からの説明を必要とするケースは、特に in の例に多い。例(8)と図6を見てみよう。

(8) The fish is *in* the hand.

hand(手)が容器と見做される物理的物体であるという考えには異論もあるかと思われるが、今ここでそう考える理由は、容器がもともと入れ物として機能している部分をわれわれは重要と考えているからである。つまり、手によって作り上げられる空間 (図7の斜線部に

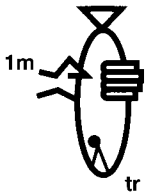

図 6

図 7

よって表わされる)を手という容器が入れ物としての機能を果たす部分であると理想化して考えることができるからである。

さて、その“hand”が landmark、trajector が“fish”である例(8)にはトポロジカルな説明は難しいであろう。ここで重要なことは、landmark である“hand”が trajector の“fish”に及ぼす力である。次の例(9)と(10)とを比較してみると、landmark が trajector に及ぼす力の重要さがはっきりと示される。

(9) *The clothesline is *in* the clothespin.

(10) The wire is *in* the pliers.

例(9)の landmark“clothespin (洗濯ばさみ)”が力を及ぼすのは干し物にであって、trajector の“clothesline (物干し綱)”にではない。したがって、この例は容認不可能な文となる。一方(10)では、landmark の“pliers (ペンチ)”が trajector の“wire (針金)”に力を及ぼすのは明白なことである。故に、例(10)は容認可能な文となる。このように、landmark が trajector に力を及ぼすかどうかが文の容認可能性を決定する。また、洗濯ばさみやペンチを容器と見做す理由は、先の手の場合と同様である。すなわち、洗濯ばさみ、あるいはペンチを実際に使用するときに trajector を入れる部分 (図 8 および 9 の斜線部)を入れ物としての機能を果たす部分と考えるという理想化が行われている。[2]

図 8

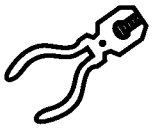

図 9

もう一つ類例を挙げておこう。例(11)は容認可能な文であるが、(12)は容認不可能である。

(11) The thief's hand is *in* the policeman's hand.

(12) *The policeman's hand is *in* the thief's hand.

ふつうに考えて、この世界のどこに泥棒に捕まえられ手を引かれていく警察官がいるだろうか。trajector に力を及ぼす landmark が "the policeman's hand" である(11)のみが容認可能である。

(8)-(12)の例から言えることは、container/contained の関係の重要な特徴の一つは、landmark (container) によって trajector (contained object) に何らかの力が及ぼされるがその逆はないということである。[3] これらの例における in は、単に inclusion というトポロジカルな概念だけで説明されるとは考えにくく、in を機能的側面から説明してくれる定義を支持することになる。

landmark の働きによって in の容認可能性に違いが生じるケースをあと2つ見てみよう。いずれの場合も in を on と比較してみることによってはっきりと説明される。まず、例(13)の "bed" と(14)の "deathbed" は trajector "John" に対してどのような働きをしているであろうか。

(13) John is sleeping *in* his bed.

(14) John is *on* his deathbed.

(13)からは寝心地の良いベッドで十分に身体を休め、休息をとっている John の姿を想像することができる。ベッドは肉体的にも精神的にも John に休息と安らぎを与える心地良いもので、John はベッドに身を包まれている(contained)という感じを抱くことができる。つまり、landmark "bed" は John にとって容器である。一方、(14)の場合には、"deathbed" からイメージされるとおり、ベッドは John にとても休息や安らぎを与えてくれるようなものではないだろう。むしろ、硬くて平板な、ただ身体を載せておくだけの働きしか持っていないように思える。このような場合には、trajector "John" は landmark に身を包まれているとは考えにくいので、in は容認されない。

(15) *John is *in* his deathbed.

また、仮に同じような形体をしていても異なった機能をもっている2つの物は、異なった前置詞の使用を引き起こすことがある。

(16) The apple is *in* the bowl.

(17) The apple is *on* the tray.

(16)の "bowl" が底が浅くて(17)の "tray" とほとんど同じ形体であったとしても、元来 tray と bowl はもっている役割が違う。 bowl は物を入れておく(contain)のに使用されるーーつまり、容器(container)であるーーが、一方、tray は物を載せて運ぶために用いられる。(16)の "bowl" (landmark) と "apple" (trajector) とは container/contained の関係にあるので、こ

の文では in は容認されるが、一方、⒄の“tray”(landmark) は“apple”(trajector) の container ではないので、この文での in は容認不可能である。

これまで in の例を中心に考えてきたが、out of について触れておかなければならない重要な点がある。次の例を考えてみよう。

⒅ *The brook is *out of* the house.

この例における landmark と trajector の位置関係は、トポロジカルには out of の関係を示す図 4 あるいは 5 によって表わされるので、⒅は一見、何の問題もない文であるように思えるかもしれない。しかしながら、out of は trajector がそもそも landmark の中に含まれていたことを条件とし、landmark の「中から外へ」の移動を含意する。したがって、例⒆のように、trajector の“John”がふつうは landmark“his office”にいるけれども、今は仕事で (landmark の中から) 外へ出ているという状況を示す場合には、out of が用いられる。

⒆ John is *out of* his office on business.

同様に、⒇のように通常いるところから外に出る状況を表わす場合には out of は容認可能であるが、(21)のようにそもそも最初から landmark の外にいることを表わす場合には out of は用いられない。

⒇ I'm going to be *out of* town for the weekend.

(21) *I live *out of* Osaka.

このように考えてくると、landmark と trajector との関係を container/contained の関係で捉え、in/out of を機能的観点から説明する方が、より多くのさまざまな例をカバーすることができるであろうと思われる。そして、先に述べたとおり、われわれ人間は自分自身を<内ー外>の方向性をもつ容器(container)と見做しており、このような肉体的経験に基づいて物事を考えているということは重要である。

この 2 つの点から、in/out of の中心的な意味を「trajector が容器と見做される物理的物体 landmark に含まれている／今は含まれていない」という関係を表わすものと考える。そして、この in/out of の中心的意味と比喩的意味とがどのように関係づけられているのかを次に見ていくことにする。

2 in/out of とメタファー

in および out of を用いた比喩表現は Lakoff and Johnson (1980) の中にも随分たくさん観察することができる。そのうちの代表的なものを中心に、どのようなメタファーが in/out of にかかわっているのかを見ていくことにしよう。また、ここでいうメタファーとは、一般的に思われている文学的効果をねらう修辞的な特殊表現のことではない。Lakoff and Johnson のことばを借りれば、「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである。」[4]

2．1　存在のメタファー

1．1で、われわれは自分自身を＜内ー外＞の方向性をもつ容器と考え、この方向性を他の物理的物体にも投影し、それらの物体もまた＜内ー外＞の方向性をもつ容器であると見做していると述べた。

この＜内ー外＞の方向性は、原初的な概念ーーすなわち、他の概念の基礎になっており、それ自体は他の概念にたよることなく、直接理解されるような概念ーーのひとつで、われわれの肉体的経験から「直接あらわれ出てくる概念」である。したがって、われわれの肉体的経験の領域が他の諸概念の基礎となっているのである。メタファーとは、ある事柄を他の事柄を通して理解し経験することであると述べたが、今の場合、肉体的経験の領域に基づいて他の経験領域を理解するということになる。他の経験領域は、肉体的経験領域よりもより具体性に欠ける概念、抽象的な概念であるのがふつうである。さまざまな抽象概念がどのようなメタファーに基づいて理解されているのかを、in/out of に関して考えていく。

1．1で示してきたように、前置詞 in と out of は container/contained の関係で説明するのがより適切であるように思われる。部屋、家などはわれわれ人間と同様、表面によって境界を接する物理的物体であるので、容器(container)であることは明らかである。ある部屋や家の中に(in)いたり外に(out of)いたりすることは、ある容器の中にいたり外にいたりすることになる。

しかしながら、世の中にはひとつの容器と見做せるための物理的境界をはっきりと備えているものばかりが存在しているわけではない。非物体的なもの、抽象的概念のようなものには実体はない。しかし、そのような領域にもわれわれは肉体的経験領域から投影を行い、実体のないものにも境界を設定し、内側と外側とをもたせるようにする。すなわち、非物体的なものも抽象概念も容器に見立てて理解しようとする。非物体的なもの、抽象概念を、いったん物体的なもの、具体的なものとして捉え、人為的に境界を設定すれば、それは見かけ上、境界面をもつ存在物、内と外とを区切る存在となる。このように非物体的なもの、抽象的なものを存在物として捉える見方を Lakoff and Johnson は「存在のメタファー(ontological metaphors)」と呼ぶ。抽象概念などを一つの存在物と見立てることによって、われわれはそれらに言及したり、数量化したり、識別したり、といったことができる。要するにわれわれは、不明瞭なものに輪郭を与え、より明瞭なものとして捉え、肉体的なものを基盤として非肉体的なものを概念化しているということである。

2．2　容器のメタファー

抽象概念や非物体的なものを存在物として捉えれば、それらは境界面と＜内ー外＞の方向性を持つ容器と見做されるようになる。われわれは、自分自身を容器と見做していると

いう肉体的経験の領域から他の抽象的経験領域への投影を行い、実にさまざまなものを容器と見做している。したがって、いろいろな容器のメタファー(container metaphors)が存在する。そのうちの代表的なものをいくつか見てみることにしよう。

＜視界は容器である (VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS)＞

われわれは、たとえばある土地領域を見るとき、自分の視力の及ぶ範囲をその領域の境界と定める。境界をもつ物理的空間は容器と捉えられるので、われわれの視界は比喩的に容器と見做されることになる。そして、自分が見るもの・見えるものをその容器の中に含まれている内容物と、見えないものを容器の外の物と考える。したがって、次のような表現が可能である。

(22) That's *in* the center of my field of vision.

(23) He's *out of* sight now.

また、先に挙げた例(2)もここの例となる。

要するにわれわれは、自分自身を容器と見做すという肉体的領域の経験に基づいて視界という明確な輪郭をもたないものを概念化している。例(2)および(22)、(23)は「視界は容器である」というメタファーによって構造を与えられている概念の例である。また、容器としての視界 (landmark)――例(2)および(23)の "sight," また(22)の "my field of vision"――とわれわれの見るもの・見えるもの／見えないもの (trajector)――たとえば(22)の "That" や(23)の "He"――との間の関係は container/contained の関係によって説明される。

＜出来事、活動、および状態は容器である (EVENTS, ACTIVITIES, AND STATES ARE CONTAINERS)＞

出来事は比喩的に物体として概念化されるが、たとえば競走というひとつの出来事は空間と時間の中に存在し、故に明確な境界をもつひとつの存在物と、したがって容器と考えることができる。それ故に、われわれは競走を「容器としての物体(a container object)」と見做し、そしてその中に競走の参加者がいると考えることができる。前述の例(5)や次の(24)のような表現が可能なのはこのためである。

(24) Are you *in* the race on Sunday?

また、競走において走るという活動は比喩的に容器の中の内容物と捉えられる。したがって、次のように言うことができる。

(25) There was a lot of good running *in* the race.

このように、一般的に活動は、比喩的に内容物(substances)として捉えられる。故に、容器(containers)とも見做すことができる。

内容物が容器とも見做されるというのは、たとえば次のようなことである。プールに水

を張ったとすると、プールは容器、水は容器の中の内容物ということになる。そのプールに入れば、プールという容器の中に入ったと同時に、プールの中の水にも、すなわち内容物の中にも入ったことになる。この場合には、内容物であるプールの中の水も容器と捉えられているわけである。したがって、プールという入れ物はもちろん、内容物である水も、容器と見做すことができるということである。[5]

さらに、さまざまな種類の状態が容器として、そしてその状態におかれているものがその容器の中の内容物として概念化されるので、(26)や前述の(6)のような例、また(3)のような感情の状態に言及する表現が可能になる。

(26) He's *in* danger now.

そして、出来事や状態(例(5), (24), (25)の "race," および(3)の "love," (6)の "trouble," (26)の "danger")と出来事の参加者／脱落者、活動、および、ある状態におかれている者／ある状態から脱した者(例(5)の "John," (24)の "you," (25)の "running," および(3)の "Mary," (6)の "We," (26)の "He")との間の関係は container/contained の観点から説明できる。

＜社会団体は容器である (SOCIAL GROUPS ARE CONTAINERS)＞

ここでは、われわれは肉体的領域の経験から社会的領域の経験へ投影を行っていることが示される。例(27)を考えてみよう。

(27) Harry is *in* the Elks.

この例における "the Elks" は1867年創立の米国の慈善保護団体であるが、「社会団体は容器である」というメタファーはこの社会団体「エルクス」を空間に存在させ、それによってわれわれにその概念を理解させてくれる。非物体的な社会団体をいったん空間内に存在させれば、われわれは自分たちの肉体的経験に基づいて、その社会団体を比喩的に容器と捉えることができる。そしてその団体に属している者を比喩的に容器の中に含まれている内容物と捉えることになる。そうすれば、メタファーとしての容器である社会団体 (landmark) とその団体に属す人(trajector) との間には container/containedの関係が成立する。

＜時間は容器である (TIME IS A CONTAINER)＞

時間もまた容器と見做されることが多い。というのは、物体があるはっきりとした境界をもつ空間を通過するとき、その空間と、物体がその空間を通過するのに要する時間との間に相互関係があるからである。この相互関係はわれわれの経験内にあるものである。

出来事や行為ははっきりと区切りのある時間の長さの中で行われ、それ故に、時間の長さはその中で行われる出来事や行為にとって容器となると捉えることができる。したがって、次のような表現が可能になる。

(28) He did it *in* ten minutes.

(29) *In* the evening, she usually walks her dog.

われわれの肉体的経験に基づいて時間という抽象的なものを概念化するとき、時間は比喩的に容器と捉えられ、その時間の中で行われる出来事や行為との間に container/contained の関係が見られることになる。

＜議論は容器である (AN ARGUMENT IS A CONTAINER)＞

「議論は容器である」というメタファーは、議論についていくつか存在するメタファーのうちの一つである。[6] 議論のもつどの側面について語りたいのか、どの面に焦点を当てたいのかに応じて、使われるメタファーが異なってくるのであるが、特に議論の内容を問題にしたいとき、この「議論は容器である」というメタファーが使われる。われわれは自分自身の肉体的経験から、容器ははっきりと境界で区切られた空間であり、境界をなす表面、中心部、および周辺部をもつこと、またその量はさまざまであるが、内容物をもつことを理解している。議論にもこれらの側面を見出すことができるので、これらのいずれかを問題にして話したいというとき、このメタファーを使えばよいのである。したがって、次の(30) - (32)のようなさまざまな表現が可能になる。

(30) That argument has holes *in* it.

(31) You won't find that idea *in* his argument.

(32) That conclusion falls *out of* my argument.

このように、われわれは自分自身の肉体的経験に基づいて、非物体的で明確な輪郭をもたない議論というものを経験しているのである。また、この容器のメタファーにおいては、議論 (landmark) は容器として、議論の中身 (trajector) は容器の内容物として、それぞれ比喩的に捉えられるので、議論とその内容は container/contained の関係で説明できる。

＜磁場は容器である (MAGNETIC FIELD IS A CONTAINER)＞

次の例は Vandeloise によって指摘されている興味深い例である。

(33) The needle is *in* the field of the magnet.

(34) *The matchstick is *in* the field of the magnet.

ここでは「磁場は容器である」というメタファーを考えてみるのが適切であるように思われる。磁場は当然、目にも見えない、手で触れることもできない非物体的なものであるが、人為的に境界を引き、磁場を存在物と、故に容器と見做すことにより、磁場の内側と外側とができる。

(33)の“needle(針)”と(34)の“matchstick(マッチ棒)”はいずれも位置的には“the field of the magnet(磁場)”の中に存在するかもしれないが、実際には、trajector が landmark “the

field of the magnet" の及ぼす力に影響を受ける場合のみ、すなわち trajector が金属製の物体である場合のみ、それは磁場の中に含まれていると考えられる。したがって、㉝のように、金属製の物体である "needle" が trajector である場合には、それは landmark の及ぼす力に影響を受けるので、磁場の中に含まれていると考えられる。故に㉝は容認可能な文となる。一方、㉞のように、trajector が金属製の物体ではない場合には、それは landmarkの及ぼす力には何も反応しない。故に、マッチ棒は位置的には磁場の中にあるとしても、実際には磁場に含まれていないと考えられ、㉞は容認不可能な文となる。

このように、われわれは自分自身の肉体的経験に基づいて、明確な輪郭をもたない磁場を比喩的に容器として、また磁場の及ぼす力の影響を受けるものを比喩的にその容器の内容物として捉えている。したがって、この 2 例の容認可能性の違いはトポロジカルな面からは説明不可能であり、container/contained による機能面からの説明が必要である。

＜人生は容器である (LIFE IS A CONTAINER)＞

人生は比喩的に、喜怒哀楽や人間が一生かかって学ぶべき多くのものがぎっしり詰まった容器であると考えられる。したがって、次のような表現が可能である。

㉟ Get the most *out of* life.

また、余生が残り少なくなれば、それだけ人生から得られるものも喜びも悲しみも少なくなる。すなわち、容器の中の内容物も少なくなると考えられる。故に、たとえば次のように言うことができる。

㊱ There's not much left for him *in* life.

いったん人生という抽象的なものが存在すると考えれば、人生は比喩的に容器と捉えられ、人生におけるさまざまな出来事は比喩的に容器の中の内容物と捉えられる。そうすれば、人生 (landmark) とその中身 (trajector) との間には container/contained の関係が成り立つ。

以上、抽象概念や非物体的なものが容器のメタファーを利用してどのように概念化されているのかを見てきた。[7] その結果いえることは、われわれは常に自分自身の肉体的経験を基盤にして、非物体的なものや抽象的なものを概念化しているということ、特にここでは、われわれが自分自身を容器と見做しているという肉体的経験に基づいて、さまざまな抽象概念や非物体的なものを比喩的に容器として経験しているということである。また、それぞれの容器のメタファーのところで挙げた in/out of の例文からもわかるように、比喩としての容器とその内容物との間にも container/contained の関係が成り立ち、in/out of の意味はその中心的意味と容器のメタファーによって関係づけられることも示された。

さてここで、以上の容器のメタファー以外に、いくつかのメタファーを考えてみたい。というのは、それらのメタファーには部分的にではあるが容器のメタファーがかかわって

いると思われるからである。またいずれの場合にも out of が中心となる。

＜物体は物質から出てくる (THE OBJECT COMES OUT OF THE SUBSTANCE)＞

われわれが直接に手で操作した結果の変化――つまり、人工的変化――の場合でも、自然界における状態の変化の場合でも、出来上がった物がもとの物と別の種類、別のカテゴリーに属す物であると見做されることがある。その理由は、それらが相互に異なった形態と機能をもっているからである。このような変化――ある状態から新しい形態と機能をもつ別の状態への変化――をわれわれは「物体は物質から出てくる」というメタファーに基づいて概念化している。それ故に、out of を用いた次のような表現が可能になる。

(37) I made a statue *out of* clay.

(38) You can make ice *out of* water by freezing it.

これらの例の "clay(粘土)," "water(水)" は、それぞれ "a statue(像)," " ice(氷)" が出てくる容器であると捉えることができる。それは「物質(内容物)は容器である(SUBSTANCE IS A CONTAINER)」というメタファーに基づいている。ある入れ物に水を入れた場合に、その入れ物と同時に中の水も容器と見做されるように、物質(内容物)である "clay" も "water" も "a statue" や "ice" が出てくる容器――厳密に言えば、「容器としての内容物(container substance)」である――と見做される。[8]

このように、「物体は物質から出てくる」というメタファー、および(37)、(38)のような例の理解は、部分的に「物質(内容物)は容器である」という容器のメタファーの理解に依存しているといえよう。

＜(状態による出来事の)因果関係とは(容器としての状態から物体としての出来事が)あらわれ出ることである (CAUSATION (of event by state) IS EMERGENCE (of the event/object from the state/container)＞

さまざまな種類の状態が比喩的に容器として経験されるというケースについては前に述べた。ここでも、感情の状態や精神状態が容器と見做されている。

(39) He shot the mayor *out of* desperation.

(40) He gave up his career *out of* love for his family.

(41) He became a mathematician *out of* a passion for order.

"desperation(絶望)," "love (for his family)((家族への)愛)," "passion (for order)((秩序を求める)情熱)" といった精神や感情の状態が比喩的に容器と見做され、"shot the mayor(市長を撃った)," "gave up his career(仕事をやめた)," "became a mathematician(数学者になった)" といった出来事や行為が比喩的にその容器からあらわれ出てくる物体と捉えられている。

これは因果関係という概念に含まれるケースのひとつで使われるメタファーであるが、ここではまず「状態は容器である(A STATE IS A CONTAINER)」という容器のメタファーの理解が必要であろう。

2．3　放射状の構造

われわれにとって重要な概念の多くは、抽象的なものであったり、明確な輪郭をもたないものであったり、直接経験できないものであったりする。そこでわれわれは、それらをより具体的な、また、より明確な輪郭をもつ他の概念を通して理解し、経験することになる。その際に必要なのがメタファーである。ここでは、容器のメタファーに基づいてわれわれは実にさまざまな抽象概念や非物体的なものを理解しているということを示してきた。その結果、われわれ人間の肉体的経験から直接あらわれ出てくる＜内ー外＞の空間概念を中心とし、肉体的経験を基盤にして捉えられ理解されるさまざまな抽象概念を周辺にもつ、放射状に広がる構造が生み出されることがわかる。そして、中心概念とさまざまな抽象概念は、それぞれ適切な容器のメタファーによって関係づけられる。in/out of の意味も同様に、その原型的意味を中心に周囲を比喩的意味が取り巻く放射状の構造を成す。これらを図10に表わしておこう。

3　副詞としての in/out

これまでは前置詞としての in/out of に焦点を当て議論を進めてきたが、接頭辞として機能する in/out や副詞と考えられる in/out なども当然存在する。以下、このセクションでは、句動詞を成す副詞として用いられる in/out に的をしぼって、その意味を中心に考えてみたい。

ここで見る句動詞は通常イディオムとして扱われているが、イディオムは伝統的には、そのイディオムを構成する個々の語の意味からだけでは予測できない意味を有する表現であると言われている。つまり、イディオムに用いられている構成要素は特別な理由もなく恣意的に選ばれており、イディオムの意味は恣意的であるというのである。しかし果たしてそうであろうか。イディオムーーそのすべてではないにしてもーーがそのイディオムの意味をもつのには、しかるべき理由があるからではないだろうか。

何かが予測できないのであればそれは恣意的であるという伝統的な見方と異なり、認知モデル理論は次のような考えをもつ。つまり、イディオムの意味が予測できないからといってそれは恣意的なのではなく、その意味は大部分、慣習的なイメージ(conventional images)によって動機づけされている(motivated)のである、あるいは、イディオムの形と意味との間の関係は恣意的なのではなくて動機づけされているといった考えである。慣習的なイメージとは、特に意識しなくても自動的に出てくる認識の部分、あるいはメンタル・

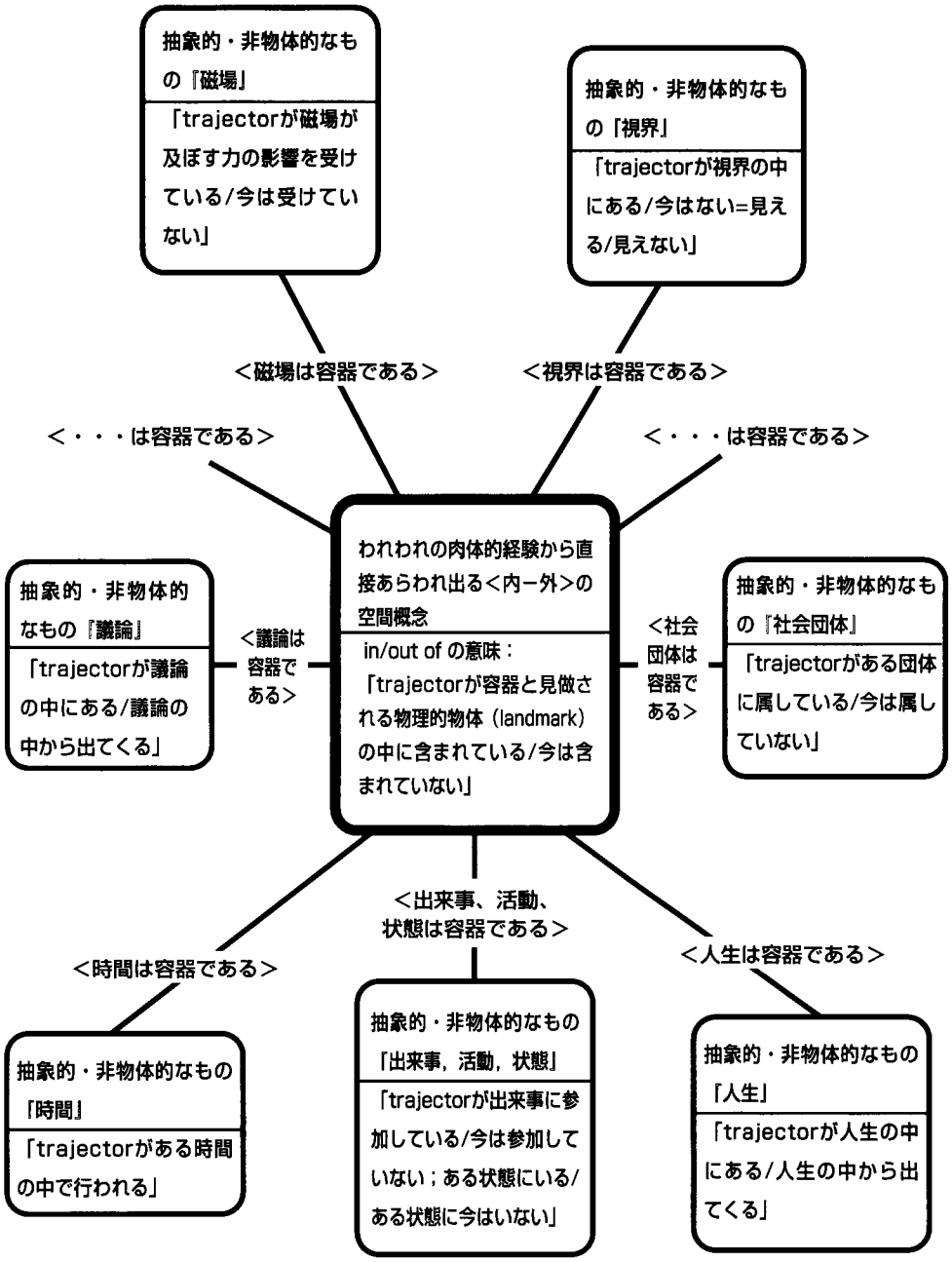

図10

イメージといってよく、同じ文化に属すメンバーであれば、ある特定のものに関してもっている無意識のイメージは全くといってよいほど同じである。

たとえば、われわれは「椅子」や、あるいは「車」をイメージするように言われたとしたら、どのような状況においても、何の苦労もなく、ある決まったイメージをもつ。また、日本人であれば、たとえば「フーテンの寅さん」についてあるイメージをもち、そのイメージは驚くほど似たようなものなのである。

このように、慣習的イメージとは、同じ文化に属すメンバーが無意識のうちにある特定の何かと結び付けてもっているイメージ、その何かを表わすことばを聞けば何の苦労もなく自動的に思い浮かべることができるイメージであるが、認知言語学者は、イディオムの意味もまた慣習的イメージによって支えられているところが大きいと考えるのである。あるイディオムと結びついている一定のイメージを同じ文化に属す人々が無意識のうちにもっているのであれば、そのイディオムがそのイディオムの意味をもつのは、これらの人々が慣習的にもっているイメージによって大いに動機づけられているといえる。

セクション2までで、in-out は<内ー外>の空間概念を中心的意味としてもち、またその意味がメタファーによって比喩的に拡大された意味をもつようになることを見てきた。句動詞を成す副詞の in/out も同様に、基本的には<内ー外>の空間概念をもち、そしてまた比喩的な意味をもつようになると考えられるが、その in/out に、英語圏の文化に属す人々はある結びつく慣習的イメージをもっているのではないだろうか。

たとえば out が用いられている句動詞は多く存在するが、そのいくつかを考えてみよう。

(42) a. I'm just going *out* for a walk.

b. When my son ... was in junior high school, he had a lot of fun with his friends at school, and often stayed *out* with them until dinner-time.

(43) a. I decided to try to find *out* what this man's problem was,....

b. ..., I still haven't found *out* why the roof curves up at the corners,....

c. ... I have figured *out* one thing that puzzled me for a long time.

d. He managed to puzzle *out* the code.

e. He was still trying to puzzle *out* why the American had behaved so irrationally.

f. As it turned *out*, she was never there.

(44) a. We're really turning/grinding *out* new ideas.

b. This process is often referred to in English as "hammering *out*" an agreement.

c. ..., I didn't fill *out* an "unaccompanied baggage" form.

(45) a. You are so composed, and nothing puts you *out*.

b. If you use that strategy, he will wipe you *out*.

(42) - (45)はさまざまな動詞と結合する副詞 out の例である。(42)の "out" はいずれも、基本的な意味で用いられている out である。(42a)の "out" は図11に示されるように、trajector である "I" が本来いる場所である自分の家(landmark)から外に出ていく状況を表わすと考え

られる。また(42b)の“out”は、trajector である“my son”が本来いるべき自分の家(landmark) の外にいる状態を表わし、これは図12によって示される。

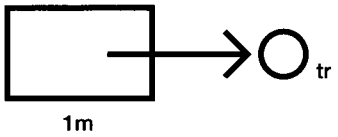

図11

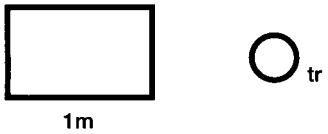

図12

したがって、いずれの out も基本的意味で用いられており、<外>という空間概念をもつ。

それに対して、(43)-(45)の“out”はいずれも比喩的意味で用いられている。まず(43)を見てみよう。out が動詞 find, figure, puzzle, turn と共に用いられている。これらの句動詞は「見つけ出す」「解決する、解く」「判明する」といった意味を表わすが、out は見えないもの・わかりにくいものを見えるようにする・わかるようにするという状況を示すのに用いられていると考えられる。図13(a)に示されるように、容器 (landmark)――底の深いものである場合は特にそうであるが――の底にあるものは一般的に見えにくいと考えられる。疑問や謎、またはっきりしないことは比喩的に、容器の奥深くに、まるで視界から隠れるように存在している物体(内容物)と捉えることができる。そして、これは図13(b)によって示される状態であるが、疑問や謎を解いたり、何が問題かを見つけ出したりすることは比喩的に、容器の中の内容物をよく見えるように外に出す行為と見做すことができる。この図13(b)は図11と基本的には同じと考えることができる。

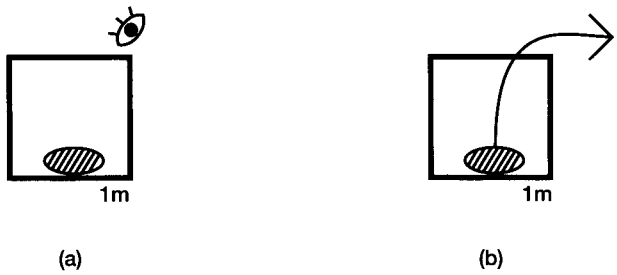

図13

このように、よく見えないものを見えるように中から外に出すということを示すためにoutが選ばれ、find, figureなどの動詞と共に用いられていると考えられる。outを選択する理由あるいは動機を支えているのは、英語圏に属す人々がoutについてもっている慣習的なイメージ――あるもの(trajector)が容器(landmark)の中から外に出るイメージ、また図11によって表わされるイメージ――であり、故にoutはでたらめに使用されているというのではなく、使われる理由があって使われているといえる。

次に(44)の例を考えてみよう。動詞turn, grind, hammer, fillと副詞outとの組み合わせであるが、これらの句動詞は「(苦心して／こつこつと)作り出す、生み出す」あるいは「(手を加えて)完成させる」といった意味を表わす。つまり、白紙の状態、あるいは何もないところから何かを生み出す感じである。初めのゼロの状態、あるいは混沌とした状態は比喩的に容器と捉えられるが、そこから何かが生み出されるのであれば、われわれはこの状況に対してやはり図11によって表わされるイメージをもつことができる。つまり、outに対してもつイメージである。したがって、ここでもやはりoutの使用は英語圏の人々のもつ慣習的イメージによって動機づけられているということが考えられる。

(45)でoutが用いられているのも、outの意味も、やはり恣意的とは考えられない。われわれは通常、平穏な、調和のとれた状態をふつうの状態と考えるが、誰かを「狼狽させる(put *out*)」行為、また「徹底的にやっつける(wipe *out*)」行為は、その誰かを普段の状態から外へ出してしまう行為であると考えられる。したがって、ふつうの状態を比喩的に容器と見做すと、"puts you *out*"や"wipe you *out*"は"you"をふだんいる容器の中から外へ出してしまうということになる。故に、ここでもoutの使用やその意味は英語圏の人々がoutについてもっている慣習的イメージ、図11によって表わされるイメージによって動機づけられており、決して恣意的なものではないことが示される。

また(43)-(45)のいずれの例においても容器のメタファーが関係していることは説明を必要としないであろう。

以上の例から示されるように、英語圏に属す人々はoutという語に対して特定の慣習的なイメージをもっており、outが用いられるイディオムの意味も、そのイディオムにoutが用いられているのも、決して恣意的なものではない。イディオムの意味は、そのイディオムが持つべき自然な意味であるし、またこれらのイディオムでoutが用いられているのは、でたらめな選択の結果ではなく、outでなければならなかった、もしくはoutが用いられるのが自然であったのである。

そして、英語圏の文化に属す人々がoutについてもっている慣習的なイメージ、「あるもの(trajector)が容器と見做されるもの(landmark)の中から外へ出てくる」というのはまさにoutの原型的意味であり、これはわれわれの肉体的経験から直接あらわれ出てくる空間概念であった。すなわち、outの慣習的イメージと原型的意味、およびわれわれの肉体的

経験とは深くかかわっているといえよう。

4　おわりに

この小論においては、2つの重要な考えを述べてきた。まず第一点は次のようなことであった。われわれ人間は自分自身の肉体的経験に基づいて物事を考えたり、理解したり、経験したりしている。原初的な概念――他の概念の基礎となっており、それ自体は他の概念にたよることなく直接理解されるような概念――は、われわれの肉体的経験から直接あらわれ出てくる概念で、たとえば＜上－下＞＜内－外＞＜遠－近＞などの空間概念が考えられる。しかしながら、われわれ人間にとって重要な概念の多くは抽象的なものであったり、明確な輪郭をもたないものであったりする。このような概念は、われわれの肉体的経験から直接あらわれ出てくる概念ではない。そこでわれわれは、他のより具体的な概念、より明確な輪郭をもつ概念、特に原初的な概念に基づいて抽象的概念、非物体的なものなどを理解したり、経験したりすることになる。このような、ある事柄を他の事柄を通して理解し経験することは、メタファーの本質である。したがって、肉体的経験に基づいてさまざまな抽象概念を理解するとき、われわれはメタファーを利用しているのである。われわれの肉体的経験から直接あらわれ出てくる空間概念と抽象的諸概念とはメタファーによって関係づけられていることになるが、これらはその空間概念を中心とし、周囲をメタファーによって関係づけられる抽象概念が取り巻く、放射状の構造を生み出すと考えられる。

これらのことをよりはっきりと示すために、この小論ではいくつかの原初的概念のうち＜内－外＞の空間概念について考えてみた。われわれは自分自身を＜内－外(in-out)＞の方向性をもつ容器(container)であると見做している。そして、この肉体的経験を基盤にして、実にさまざまな抽象概念や非物体的なもの、明確な輪郭をもたないものなどを理解し、経験している。つまり、自分自身がもつ＜内－外＞の方向性を抽象概念などにも投影し、それらをも内側と外側とをもつ容器に見立てて理解しているのである。このときわれわれは、存在のメタファー、および容器のメタファーを利用している。われわれの肉体的経験から直接あらわれ出てくる＜内－外＞の空間概念とその経験領域からの投影が行われている抽象概念などは、容器のメタファーによって関係づけられているということである。そして、原初的な＜内－外＞の空間概念を中心とし、周りを容器のメタファーによって関係づけられる抽象概念などが取り巻く放射状の構造が形成される。

またこのように考えるとき、in/out of の原型的意味はわれわれの肉体的経験に基づいており、あるもの (trajector) が容器と見做される物理的物体 (landmark) の中に含まれている(contained)か否かという関係を表わすことになると考えられる。これは、従来よく言われている inclusion/exclusion という概念によって in/out of をトポロジカルに記述するという立場よりも、container/contained という機能的な関係による in/out of の定義を支持する大

きな要因となる。

さらに、われわれは自分自身を容器と見做しているという肉体的経験に基づいてさまざまな抽象概念や非物体的なものを比喩的に容器として経験していると述べたが、比喩としての容器とその内容物との間にも container/contained の関係が成り立ち、in/out of の比喩的意味はその中心的意味と容器のメタファーによって関係づけられる。そして、原型的意味を中心として周囲を比喩的意味が取り巻く放射状の構造が生み出される。

この小論において述べられたもう一つの重要な考えは、イディオムの構成要素、およびその意味は恣意的なものではなく、同じ文化に属すメンバーが語やイディオムに対してもっている慣習的なイメージ(conventional images)によって動機づけられている(motivated)ということであった。

このことを示すために、副詞 out が用いられている句動詞の例をいくつか考察してみた。その結果示されたことは、英語圏の文化に属す人々は out という語に対して特定の慣習的なイメージ――これは out の原型的意味と深くかかわっている――をもっているということ、イディオムにおける out の使用、その意味、そしてイディオムの形と意味との間の関係は、決して恣意的なものではなく、この慣習的なイメージによって動機づけられているということであった。イディオムにおいてある語が構成要素として用いられるのは、それが自然であったからであり、イディオムの意味はそのイディオムがもつべき自然な意味である。そして、あるイディオムにある語が用いられているのは、でたらめな選択の結果ではなくて、そのイディオムにおいてその語の表わす意味が必要であるが故の結果なのである。

最後に、prototypicality に関して触れておきたい。この小論では、原型ということに関して in/out (of) の意味の面についてのみ考えてきたが、別の面での prototypicality も考えられる。in/out (of) は3次元の landmark について用いられるのが原型的あるいは基本的であるが、2次元あるいは1次元の landmark と共に用いられることも多い。たとえば、"To vote, put an X *in* the appropriate box" においては landmark は2次元、"Hey buddy, you gotta stand *in* this line just like the rest of us" においては1次元である。

一例だけ詳しく見ておくことにしよう。次の例(46)――これは Lakoff (1987) からのものである――においては landmark は2次元であると考えられる。したがって、この例にはこれまでの容器による説明も、また図11による説明もあてはまらないであろう。

(46) The syrup spread *out*.

この例は次のように説明される。"syrup" は最初、図14(a)に示される状態にある。これはシロップを、たとえばホットケーキの上にかけたり、テーブルの上にこぼしたりしたときの最初の状態である。その状態における端、あるいは境界線を円で示している。そして、はじめ境界線の中にあったシロップの一部がその境界線を越えて周りにどんどん広がって

いくのであるが、その状況は図14(b)のように表わされる。[9]

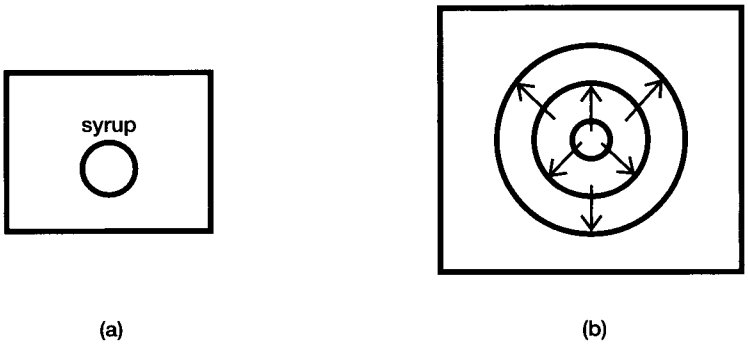

図14

このような場合、landmark は平面的な領域という 2 次元の状態であるが、それでもout が用いられる。それは、out の表わす意味がやはり「中から外へ」であるからである。容器の中から外に出るにしても、平面的領域の中から外に出るにしても、「中から外へ」のイメージを out という語がもっているのであり、これは out に対して英語圏の人々がもっている慣習的なイメージなのである。すなわち、2 次元の landmark と共に out を使用することについても、およびその際の out の意味についても、英語圏の人々がもつ慣習的イメージによる動機づけがあるということである。

しかしながら、われわれの肉体的基盤に基づいて考えると、in/out (of) は landmark が容器である場合、すなわち 3 次元である場合に用いられるのが原型であり、2 次元および 1 次元の landmark と共に用いられる場合は周辺的であると思われる。このように、landmark に関する prototypicality も考えられるが、この問題に関しては、今後の研究の課題としたい。

注

1．同音異義説、および抽象化説の問題点などについては Lakoff and Johnson (1980: 106 - 14) を参照。

2．Vandeloise は例(8)および(10)について、landmark は trajector を(部分的に) “contain” しているというよりもむしろ “hold” していると述べている。

3．“A (tr) is *in* B (lm)” と同時に “B (tr) is *in* A (lm)” の関係も容認される場合がある。たとえば次の例は、“priest” の “hand” と “minister” の “hand” の両方が相互に同等

の力を及ぼし合っている場合のみ容認可能である。

- The priest and the minister walk hand *in* hand.

つまり、"The priest's hand is *in* the minister's hand" と "The minister's hand is *in* the priest's hand" の両方の関係が同時に成り立つということである。

このように、in は相互的関係を表わすことも可能だが、landmark と trajector の双方の力が等しくない場合には、例(11)と(12)で示されたように、landmark が trajector に力を及ぼすということになる。

4．"The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another." (Lakoff and Johnson 1980: 5)

5．プールもプールの中の水も両方とも容器と見做すことができるが、ただし、プールは「容器としての物体(a container object)」、一方、プールの中の水は「容器としての内容物(container substance)」と区別される。また、内容物を容器と捉えるのは、「内容物は容器である(SUBSTANCE IS A CONTAINER)」というメタファーに基づいている。

6．議論についてのメタファーとして、他に「議論は戦争である(ARGUMENT IS WAR)」や「議論は旅である(AN ARGUMENT IS A JOURNEY)」などがある。詳しくは、Lakoff and Johnson (1980) を参照のこと。

7．抽象概念でもなく非物体的なものでもない実体のある存在物であるが容器ではないというものがある。たとえば目がそうである。目は手で触れることのできる物体であり、実体のある存在物である。しかしながら、容器ではない。このような場合にもわれわれは容器のメタファーを利用しているようである。したがって、たとえば「目は感情の容器である(THE EYES ARE CONTAINERS FOR THE EMOTIONS)」のような容器のメタファーを考えることができる。われわれはたとえ口では何も言わなくても、目で多くのことを語ることができる。目は比喩的にいろいろな感情を含む容器なのである。そして、たとえば情熱、愛情、恐怖心といった感情は、その容器の中の内容物と捉えられる。したがって、"There was passion *in* her eyes," "Love showed *in* his eyes," "I could see the fear *in* his eyes," "She couldn't get the fear *out of* her eyes" などの表現が可能になる。そしてこのメタファーの場合にも、landmark と trajector との間の関係は container/contained の関係によって説明される。

8．注5を参照。

9．はじめ境界線の中にあったシロップ(の一部)がその境界線の中から外に出て広がっていくという状況では、"syrup" は trajector でありながら同時に landmark になると考えられる。つまり、シロップ(の一部)――trajector――が最初の状態のシロップを landmark としてその中から外へ移動し、その外に移動した trajector が今度は新たな landmark を形作ることになる。そして新たにできた境界線を新たな landmark の境と

してその中からまた一部のシロップが trajector として外に出て広がっていくということである。本文中の図14(b)にも示されるように、シロップの広がりはこの繰り返しであると考えられ、したがって、シロップは trajector になったり landmark になったりするといえる。

参考文献

尼ケ崎彬 (1990)『ことばと身体』 勁草書房.

Casad, E.H. and R.W. Langacker (1985) "'Inside' and 'Outside' in Cora Grammar." *International Journal of American Linguistics* 51: 247-81.

Hawkins, B.W. (1984) *The Semantics of English Spatial Prepositions.* Ph.D. Dissertation. San Diego: University of California.

Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* The University of Chicago Press.

—— and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By.* The University of Chicago Press.

Leech, G. and J. Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English.* Longman.

Vandeloise, C. (1991) *Spatial Prepositions.* The University of Chicago Press.

引用例出典

Hawkins, B.W. (1984) *The Semantics of English Spatial Prepositions.* Ph.D. Dissertation. San Diego: University of California.

Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* The University of Chicago Press.

—— and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By.* The University of Chicago Press.

ピーターセン, M. (1988)『日本人の英語』 岩波書店.

Sakamoto, N. and R. Naotsuka (1982) *Polite Fictions.* Kinseido.

Vandeloise, C. (1991) *Spatial Prepositions.* The University of Chicago Press.

上記の出典にない例文、また例文の容認可能性に関しては Vincent A. Broderick 氏に御協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。